

春燈

3 月号

万太郎の句

なにがうそでなにがほんとの寒さかな

句集『冬三日月』昭和二十四年

社会的には確固たる地位を築いていらつしやつた師であるが、私的には何回も居を移し、愛する人々をつぎつぎ失つて、まことに流寓と孤独の人生であつたと言つて他ない。心の寒さの中 “影あつてこそその形” を俳句に具現しつつ、ひたすら虚実を探索し信まことにすがつた一生であつたのではないかと思う。昭和三十八年死の直前の句へ一輪の牡丹の秘めし信かなにそれを見る様な気がする。

中村喜美子

万太郎の句

寒さとはカラニのつなぐ間なりけり

「春燈」昭和二十三年

舞台の袖から、ぽつん……ぽつん……と間遠にカラニの音が聞えてくる。劇場の寒さをいや増すように。(仮名手本忠臣蔵四段目)「技巧なしには発句は存在しない」と言う万太郎至芸の句である。実は私にはもつと好きなのがある。「知恵の輪のちゑでぬけずにひよつくりとはずみでぬけたおもしろさ だからさ」「だからさ」この呼吸を俳句に活かしてみたいのだが……

伊藤冬青

主宰の句

西ヶ原日記 (四)

鈴木榮子

まゆ玉に啐啄のことありにけり

初旅の北関東を恵方とす

十六むさし雪隠詰に逃げ込みり

小酌の年酒振舞あづかりぬ
千足屋の食べる宝石冬いちご
ゴム手毬つく副級長にいつも負け
逆上りたうとう出来ず卒業す
深更に進む稿なり春さむし
水上小学校へ転校の子に三月来
父母の船待つ子と遅日共にせり

家常瑣事

橋爪隆

三楹は師縁の花の盛りかな
寒醸す金柑の甕ゆすりけり
大綿の飛び来て髪に濡れけり
年跨ぐ欄間形見の舞扇
なにもかもひとり煤を払ひけり
道行の菰かぶりけり寒牡丹
手焙はあらかた尉や牡丹園
冬ふかむ老ふかむポツペン吹きにけり
七草やひとりのひまを神詣
ポケットのふくらむ鸞を換へにけり

箱根八里（東坂）

深川敏子

「天下の嶮」中学唱歌初山河
冬ざるる旧街道の難所越え
雪蓑を着け行く宗祇旅に病む
檜櫂孤高の枯を尽しけり
馬立場寒九の水を馬が飲む
寒明くる鬼の遊び場石畳
詫び状や甘酒茶屋の白障子
ぼつぺんや日輪ゆらぐ杉並木
二子山四つ子にふえて笑ひけり
寄木独楽ゆつくり彩を戻しけり

当月集

鈴木 榮子選



○ 荻野嘉代子

始皇帝の水鳥忽と彼の世より(中国展)

女坂御慶の長き日向かな

デパートに江戸木遣聞く三日かな

読初に行基の地図に出会ひけり

「無腸」銘秋成の墓風花す

○ 菅沢陽子

熨斗餅の延ばし不足の厚さかな

熱爛に蟹味噌をまづつつきけり

去年今年新居見取図展べにけり

寸松庵色紙に一句筆はじめ

西文字の切手の十種買初す

○ 宮地れい子

十人が三人となる大櫓火

形見分けの中に羽子板と羽根

食ふも馬鹿食はぬも馬鹿や鉄砲鍋

葉包紙鶴となりたる猪日かな

舞二年太鼓三年初稽古

○ 太田佳代子

空壇に硬貨落して冬ぬくし

年の瀬や父の暮しと母の墓と

ひとり夜の咳こぼしぬる厨かな

数へ日のその一日の暮れゆきぬ

汽水より始まる海や都鳥

春燈の句

鈴木 榮子選



数へ日の消防詰所ゆるぎなし

茨城 吉田飛龍子

獺犬を放ちしあとの静寂かな

三重 上野 進

初筑波にて安穩を祈るかな

銃響き森の生命の一つ消ゆ

塩味の薄き雑煮を祝ひけり

注連飾買ふ血のごときワイン下げ

泣初めす劇中劇の再会に

初明り老犬いよよ学者面

大き背の冬日に紛れ給ひけり (悼)

埼玉 鈴木 撫足

嘘まげて初夢語る看取り妻

東京 吉田かずや

確かむる愛の在り処や降誕祭

帽脱げば湯気立つつむり雪卸し

ハンドベル余韻の黙や聖樹燦

角巻のなかに手を引く子が隠れ

ソクラテスの妻に戻るや春着脱ぐ

土筆摘む昭和を知らぬ少女たち

冬ざれや墨跡永久の明月記

神奈川 松波とよ子

冬晴や雨後の霧吐く大櫓

長野 高嶋 文清

良寛の書線見惚るる初明り

寒晴やささらの如き軍鶏の首

筆はじめ磨る墨の銘「ぬれからす」

熊笹に風立ち上る実朝忌

若冲の鶏の雄叫び初磨

杣人の火にあたたまり山眠る

余言

鈴木 榮子

数へ日の数より為すべき事多し

渡辺 泰子

数え日とは何日位のことかと何度か質問にあった。季語で言う「数え日」は年内数え日といって、指で折って数えられる日、ということとは言うまでもない。

ただそれで五指を越える六日であるから数え日とは言えないということはない。六日も七日でも年詰って何か起つて気持の上で数え日と思つたらそれでよいであらう。

この句、年詰って為すべきことが山ほどあつて、正月を迎えるまでにとでもこなせないという焦躁の気持をずばりと言い切つてあり、だれでもが経験したことがあると思ふ。

初放鷹主従阿吽の呼吸かな

秋場 貞枝

正月三日、浜離宮で鷹匠が何人か集つて鷹を放ち、餌の鳥をつかまえるところを披露して見せた。毎年行ふように入場

料三百円である。

苑内の広場を七、八名の鷹匠がまず左手の手の甲に鷹をとまらせ、見物人に驚かないように二三周する。その後二名の鷹匠が出て来て一方の手に乗っている鷹を呼ぶと相手方のところへ飛んでゆくことになつてゐる。綱はつけていないのでこの時は一羽はどうとう受手のところへ行かず築地市場の方へ飛んでいつてしまつた。見てゐる方は心配したが、後では歸つて来たことであらう。

終りに見物席の方へ鷹を手に乗せて見せに来てくれたが、鷹の全身の羽のなんと美しかったことか。「羽振りがよい」とはこんなことをいつたのかと思つた。餌をうまく捕えるため鷹を放つタイミングが肝要、それを阿吽の呼吸と表現したところが作品の手柄である。